東北支部通信　No.26　2025 年 12 月 1 日号

東北支部第２６回学術集会が開催されました

去る 11 月 9 日、東北大学医学部星陵キャンパス医学部講義室にて、第 26 回となる東北支部学術集会を開催いたしました。この学術集会は日本東洋医学会宮城県部会のご厚意で共同開催となり、特にシンポジウムは相互からシンポジストが登壇しての活気ある企画となりました。ここにご報告いたします。

シンポジウム「家庭・在宅医療」

日本東洋医学会宮城県部会との合同シンポジウムを開催し、「家庭・在宅・地域医療などにおける連携医療」をテーマに医師・鍼灸師・薬剤師・按摩マッサージ指圧師の先生方よりご発表いただきました。

まず、東北大学病院漢方内科の齊藤奈津美先生より、超高齢社会を迎えた現在、地域医療では医療と介護福祉、行政を含めた多職種連携が不可欠であることが共有されました。漢方および鍼灸は、総合診療・プライマリ・ケアの現場で求められる役割が大きく、地域医療の一翼を担うためには、他職種との情報共有が重要であるとの考察が示されました。

続いて、おいで薬局の生出拓郎先生より、地域に根ざした薬局と鍼灸院が担う「予防医療」の実践として、養生講座や健康新聞の発行など、中医学の「未病先防」を地域に広げる取り組みが紹介されました。「孤独」や「孤立」を防ぎ、人が集える場所づくりが健康支援につながること、そして医師・鍼灸師・薬剤師が協働し予防を普及することが新たな連携の形となり得ることが示されました。

さらに、地域で鍼灸施術を行う相澤はり・きゅう・マッサージ治療院の相澤啓介先生からは、院内施術と訪問施術の比較を通し、患者が求める支援の違いと、多職種連携の重要性について報告がありました。院内では短期間での症状緩和が期待される一方、訪問施術では ADL 向上を含む長期支援が求められ、施術中の対話を通して体調の変化を把握しやすい利点も強調されました。仙台けんえい訪問院の栗和田健規先生からは保険制度を活用した訪問鍼灸マッサージの症例紹介では、鍼灸介入が疼痛や筋緊張改善に寄与した事例も示され、在宅領域における鍼灸の有用性が確認されました。

総じて、地域包括ケアの中で鍼灸師・薬剤師が担う役割は拡大しており、効果の可視化・情報共有の仕組みづくりを進めることで、より強固な医療連携の構築が期待される内容となりました。フリーディスカッションでは医師と鍼灸師の連携のポイント、連携システムについて意見の交換を行いました。

特別講演「スポーツ分野における鍼治療」

仙台赤門短期大学の鍼灸手技療法学科の学科長である宮本俊和先生に「スポーツ分野の鍼治療」という演題で、ご講演いただきました。長年スポーツ分野に携わり、豊富なご経験をもとにお話をいただきました。冒頭のお話で、スポーツ領域では選手のサポートに関わる職種の連携について、以前は「アスリートファースト」と言われていたが、今は「プレイヤーズセンタード」とし、選手だけがファーストではなく専門家全てがファーストであり、専門性を高め支えるという形に変わってきているとお話いただきました。オリンピック選手村でのお話や視覚障害スポーツのお話は中々聞くことが出来ない貴重なお話でした。実は、パラリンピックでのメダリストに鍼灸マッサージ資格保有者が１０人以上も居ると伺い、大変驚きました。ご講演内容は幅広く、非常に内容が深いもので、まだまだ理解の足りない分野も多く、幅広く鍼灸の活躍の場があるのだと改めて認識する事が出来ました。

【一般口演発表・学生発表】

一般口演発表①「潰瘍性大腸炎患者に対する鍼通電療法の文献レビュー」東北大学病院の石井祐三先生

より、ご発表いただきました。近年増加している、過去 10 年間の潰瘍性大腸炎の鍼通電療法についてのレビューについて多方面からの分析となりました。
基礎研究や使用された経穴や鍼の太さ、通電の周波数、通電時間など、細かな部分まで分析されており、非常に興味深い内容でした。また、臨床研究では仙骨部の鍼通電についての分析では、まだまだ質の高い研究結果が得られていないという結果となり、今後の研究に期待する部分が大きくありました。

一般口演発表②「終末期の膵神経内分泌腫瘍に伴う身体症状への鍼灸治療の１症例」さとう鍼灸院　院長の佐藤駿先生より、ご発表いただきました。
　病院内の鍼灸治療ということもあり、貴重な発表となりました。治療開始から１週間後、全身状態が改善し自宅療養となった経過などから、鍼灸治療は終末期医療でも重要な役割を果たすことを改めて感じました。一時でも自宅療養となった患者は、終末期医療の中でも心身の不安を和らげ、QOL を向上させることができたと考えられますし、ご家族も満足しておられたのではないかと感じる、非常に鍼灸治療の有用性を示す発表でありました。

一般口演発表③「身分法としてのあはき法の問題点と考察」一寸法師ハリ治療院　院長の中沢良平先生より、ご発表いただきました。はり師・きゅう師・あん摩マッサージ指圧師にとっての命綱である、あはき法について、識者によって見解が分かれる非常に難しい問題についての分析・考察となりました。
　医業類似行為の定義の明確化や、資格法としての問題点など、多角的な視点から考察されており、改めて自分事として考えなければならない問題であると強く感じました。また、中沢良平先生は、公益社団法人日本鍼灸師会のあはき法改正推進チームとしてもご活動されており、今後、業界として、どのように動いていくのか、要注目の事項であります。

一般口演発表④「鍼灸介入前後での、体外受精採卵成績の変化について」三瓶鍼療院院長の三瓶真一先生より、ご発表いただきました。鍼灸介入前と介入後では明確な成績の違いがあり、鍼灸治療で移植可能な杯数が大幅に改善するという、鍼灸の有効性が証明された発表でした。年齢や個人差はあるかもしれませんが、西洋医学的治療では明らかな効果が見られない場合であっても、鍼灸治療で良い効果が得られる可能性があるという、不妊に悩む方々には希望が持てるものであると感じました。また、本治法と並行して行われていた鍼通電法については、すぐに臨床で使える技術であり、会員にとっても有効な手技でした。

学生発表①「全日本鍼灸学会学生発表の地域分布と開催地効果の定量分析～11 年間を対象とした地域別参加傾向の分析～」仙台赤門短期大学　鍼灸手技療法学科 1 年　伊藤優介さんより、ご発表いただきました。学生発表の地域分布を分析した事例はなく、学会運営に携わる者として、大変興味深い発表でした。西日本の方が鍼灸養成校の数が多いため、学生発表が多くなる傾向がありますが、交通の便などを鑑みても宮城大会で発表数が少なかったことは、改めて反省材料となりました。学生発表が多くなれば、全国大会も非常に盛り上がりますし、学会活動の活発化を目指す上で、学生発表をどのように増やしていくかが課題であると感じました。今後、東北の学生が多くの発表をしてくれることを期待しています。

学生発表②「全日本鍼灸学会における学会発表の傾向分析～コロナ禍が促した学生発表の客観化と進展～」仙台赤門短期大学　鍼灸手技療法学科 1 年　吉田悠馬さんより、ご発表いただきました。演題名自体を解析し、発表の傾向分析をするという新たな着目点からの発表でした。その年の出現ワードがコロナ禍以前と以後でわかりやすく分析されており、社会的変化や流行、注目されたものを一目で振り返ることが可能となっていました。学会の発表では、その年のテーマにも左右されることはありますが、今後、どのようなキーワードが注目されていくのか、気になる発表でした。
学生発表では、お二方とも 1 年生ながら、非常に聞きやすく堂々たる発表でした。
在学中・卒後も、たくさんの研究発表を期待しています。

　このほか、**（株）ツムラの協賛による日本東洋医学会宮城県部会との共同参加のランチョンセミナー**もあり、盛りだくさんの内容になりました。